九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ソオロウとその生活観

中山, 竹二郎

https://doi.org/10.15017/2332979

出版情報：文學研究. 37, pp.107-122, 1948-12-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

ソオロウとその生活觀

中山竹一郎

まえがき

敗戰後の無明と混亂に喘ぎながら、何か生活上の示唆を求めようとして、アメリカの文人ソオロウを讀み直してみた。本稿はその折の覺え書きに過ぎない。生來私にはソオロウほどの氣魄や精力がないので、彼の生活哲學を實踐に移す力など迚もありそうにない。いかに東洋的な傾向が强かつたにせよ、ソオロウはアリアン人でありアリアン的なたくましさを有つている。殊に彼の個人主義的な思想と實踐の熾烈さに對して我々はただ目を瞠るばかりである。しかし彼が强調して說いた生活の簡素は本來われわれの傳統の基調をなしてゐたものであり、西洋文化の洗禮を受けて以來、之は大に失はれては來たが未だに我々の生活は多くの面に於て簡素さ單純さを保つてゐる。

敗戰後の我々の生活は粗雜化され、時に原始化されるの止むなきに至つた。これは經濟的の制約に因つて起つた生活形態の崩れ以外の何物でもない。ソオロウの探求した生活の單純化とは凡そ緣遠いものに違ひない。しかし乏しい資財を以て內的生活を豐かにする、という彼の理念が實踐されて最も効果的であるのは、現下の我々が否應なしに置かれてゐる生活環境に於てではあるまいか。わが國の政治的指導者は屢々耐乏の必要を說く。耐乏は忍苦と禁慾を意味する。それは消極的であり、淋しい諦めが前行する、そうでなく、乏しさの中に安住しようというのがソオロウの理念である。

「淸貧」とか、「貧困との結婚」という槪念は全く中世的な迷妄に過ぎないのだろうか。窮乏そのものの中に法悅を感じ、神聖さを認めるのは全く狂信者の錯覺に過ぎないのだろうか。之に對する一の答として、私はソオロウの場合を持出したい。彼は常識的な、實際的なヤンキーであつた。しかも彼は、彼一流の經濟學的見地から

貧困を肯定し、貧困を享樂した、古代東洋思想に影響されたに違ひないけれども單にそれにかぶれたというのでなく、彼は十九世紀前半のアメリカ人一般の現實生活の中に不必要なもの、過剰なものの數多くを發見し、之を棄て去り、生活上の煩瑣を最小の限度に喰ひ止めようとした。ここに彼の簡素生活說が生れた。一見して禪宗坊主のような超俗的な隱遁的な傾向も見られるが、ソオロウの簡素生活は、その理念に於ても實踐に於ても、極めて積極的であり、精神的意義を强調する一方に官能的な面を決して忘れてゐない。近代文明を全面的に否定するのではないが、その精神的効用については大きな疑惑を有つてゐる。とにかく近代アメリカ思想家の中の變り種である。一應彼の言う所に耳を傾けるのも徒爾ではあるまいと思う。

ソオロウは詩を書いてゐるが、それは大したものではない。彼は自然研究家でもあつた。その方面では相當に良い仕事をしたが、嚴密な科學的の博物學者とは云へないらしい。彼はまた個人主義に徹した政治理念を有つてゐた。これは世界の一部に深い影響を與えたし、また民主主義思潮と對照して考察して極めて興味が深い。しかし拙稿ではただ彼の生活に關する說を紹介するにとどめる。

一

アメリカの產業革命が齎らした機械文明はアメリカ人の生活を物質的に豐かにはしたが、心の素朴さと靜かさは此のために失はれて、生活の複雜化につれて精神的價値が益々忘れられる傾向を生じた。かうした傾向に對し、激しい抗議を提出し、身を以てその抗議を實踐したのは、十九世紀中葉に於けるニュウ・イングランドの文人ソオロウであつた。彼の主張した精神の純潔と生活の單純化とは、その當時からこれを顧る人が少く、むしろ痴人の言葉、奇矯の說としてまともに受容れられなかつた。そしてアメリカの資源の豐富さはますますその物質文明の躍進に拍車をかけ、十九世紀後半からこの世紀に入つてから滔々たる機械化の風潮はアメリカ生活のあらゆる面に流れ込んで來た。機械によつて人間の勞力を節約しようとする意圖は、却つて機械によつて人間の生活が煩瑣化する結果を生むに至つた。しかし一般アメリカ國民がその繁榮と產業文化の進展に自己陶醉してゐる中に、懷疑的な批判的な識者はこれに對し深い反省と檢討を加へるに至つた。シンクレア・ルイスの小說『バビッ

ト』（一九二二年初版）は富と繁榮の追求に餘念のないアメリカ市民階級の自己滿足に對する辛辣な諷刺であり、そこに如實に描き出されてゐる主人公バビットの生活は、高度の産業文明の齎らす生活が如何に煩雜であり無意味であるかを示す悲喜劇として見られるのである。

ソオロウが身を以て體驗した人生と、「バビット」の中に描かれた主人公バビットの人生は餘りにも違つてゐる、明かに對蹠的でさへある。一方が、物質文化の與へる殆ど一切の物を拒否して原始人に近い衣食住に滿足して只管自然の美を探求し精神的教養に精進したのに對し、他方は、アメリカの機械が生産するあらゆる物を受容れ、その過剩な物の中に窒息して心の所在を忘れてしまつた。一方が中なるものを深めようとして外なるものを顧みなかつたのに對し、他方は外に擴がらうとして中なるものを萎縮さした。例へば渴を醫するに、一方が池の水を掬して飲んで滿足したのに對し、他方は製菓會社製の清涼飲料を攝るのに焦慮した。また例へば宗教の問題でも、一方は教會の信仰に據らないでも死に臨んで心の平靜を些も擾すところがなかつたのに對し、他は宗教事業の蔭にかくれて利得の打算を忘れなかつた。

ソオロウは十九世紀中葉の、超越派哲人群の一人であり、バビットは二十世紀初期の新興市民階級に屬してをり、時代に於ても社會層に於ても喰違いがあるから、前に述べたような對蹠的生活態度の差も、これが現時のアメリカの現實の中に見出されるといふ意味では勿論ないのである。畢竟筆者がソオロウの生活を檢討するまへにバビットを引合ひに出したのは、彼我の對照によつて、今後滔々として流入して來るであらう機械文化の餘弊に對する一服の解毒劑としてソオロウの生活態度が若干の反省資料を供給してくれるのであらうと信ずるからである。

二

本論に入るまへに、ソオロウの生涯を一瞥しよう。

（ヘンリ・ディヴイッド・ソオロウ（Henry David Thoreau）は一八一七年アメリカ東部のボストン市に近いコンコオド（Concord）といふ村で生れた。彼の家は裕福でなく鉛筆製造を業としたが、ソオロウはそれでもハアヴアド大學に學んで古典を修めることができた。大學を卒へた後も彼は定業に就くことを喜ばないで、生活費を稼ぐ必要に迫られると、土地測量とか、家業の鉛筆製作とか、農業の手傳ひなどの勞役に服したが、大部分

の時間は讀書や附近の丘や野を逍遙して過した。このコンコオド村には哲人エマスンを始め、ホオソオンその他の所謂「超越派」の智識人が移り住み、一時はアメリカ文壇の本據となつた。ソオロウはかうした哲人文士と交り、しばらくの間はエマスンの家に同居して家事の手傳をしたこともあつた。そのためかエマスンの感化を受けること深く、その談話振りや文体まで自らエマスンのそれに似て來たと云はれてゐる。嘗て歐洲への旅行を勸められたがこれを却ぞけたばかりか、アメリカ國内の他の地方へも餘り出かけることもなく、生れ故郷のコンコオドの天地を人生の道場として、極めて乏しい生活の中に思索と讀書と自然觀察とを樂しみ、その體驗を論文や隨筆に、時には詩に、誌して之を發表したが、著作としては「コンコオド、メリマック兩河上の一週間」（一八四九年出版）、「林野逍遊」（一八六三年）、「メエンの森」（一八六四年）等の外には有名な「ウォオルデン、森の生活」（一八四五年）がある。この最後の本は彼が簡易生活の實驗としてコンコオドのウォオルデン池畔に文明から遠ざかつた孤獨生活を二年二ケ月に亘つて試みた體驗の記錄である。ソオロウはその家族や親友に對しては人一倍に溫い愛情を有つてはゐたが、社交的な才能を欠き、その風貌や擧止も野人的な趣きがあつた。その性格には不羈獨立を重んじ自己の信念を貫く不敵の强さがあつた。彼は奴隷制度を認めてゐる州政府に對しては納稅の義務はないと主張して之を實踐したために監禁されたが、友人が彼に代つて納稅して辛ふじて赦免されたことがあつた。惡政を布く國家には服從の義務はないとする彼の無政府主義に近い理念は彼の論文「人民の反抗」（一八四九年）に現はれてゐる。因みに印度のガンディ翁が獨立運動に無抵抗主義を唱道したのはソオロウの此の論文から示唆を得たといはれてゐる。また彼の知友であり熱烈な奴隷廢止論者であつたヂョン・ブラウン（John Brown）がその運動のために一八五九年秋官憲に逮捕され反逆の罪に問はれて處刑されようとした時、ソオロウは靜寂な生活の中から奮然として起ち「叛徒」ブラウン擁護のために一大辯論をコンコオドとボストンで行ひ、世人の思はくや一身の危險を顧みなかつた。『コンコオドの世捨人』と思はれてゐた彼の中に湛えられたかうした熱情は彼の性格の本質を明にする。徹底的な個人主義と不羈自立の使徒である彼は神秘的な冥想家であると同時に果敢な實踐者であつた。

生來頑健な體質に惠まれなかつたソオロウは三十七八

才の頃から健康の衰へを示し始め、一八六〇年の冬、深い雪の中で樹木の年輪を研究したのが因で氣管支を痛め、遂に肺病を發し、病床に身を横へるに至つた。しかし彼は病人も仕事を廢してはならぬといふ彼の持論通り、最後まで原稿を手放さなかつた。ソオロウは平素からキリスト教會の何れにも屬しないで、古代希臘や特に東洋の哲學に親しんだ。彼の生活態度や思想の中に東洋的なものが多分に存するのも、その一の結果であらう。さてソオロウが重態に陷つて再起の望が絶えた折、彼を見舞つた一友人は彼に向つて、君は神と和解しては如何かと勸めた。これに對しソオロウは、別段に神と爭つたこともないから今更和解を求めることもあるまいと答へて平然たるものがあつた。

一八六二年の春の朝ヒヤシンスの馨りを賞で了つて、やがて靜かに苦しみなく慈母と愛妹に介抱されながらソオロウは息を引き取つた。

三

ソオロウは單純生活の近代文明社會に於ける緊要を唱道し、身を以て之を體驗した。人は食ふために生きるのでなく、生きるために食ふのであるから、『食ふこと』つまり衣食住は生命をつなぐに足りる以上を必要としない筈である。米鹽の資を稼ぐための勞働を最低限度にとどめ外なる生活を簡易化し內なる精神的の豐富を獲得せねばならぬといふのが彼の生活觀の主眼である。そして彼の主張する單純生活は物資の窮乏に處するための止むを得ない耐乏生活でなく、窮乏そのものを樂しみ、複雜と過多を捨てて單純と淸淨とを求める生活である。

ソオロウが世人から愚と笑はれ狂と嘲けられるやうな森の生活を試みたのは、彼の特自な不羈獨立の精神による。思索に於ても實踐に於ても彼は外的な權威を一切認めなかつた。いかに古い傳統であつても、社會全般の習俗であつても、彼の良心と理知が是認しない限りは、これに服從することのできない彼である。ソオロウは云ふ「思考や行動の規準が如何に古來傳承のものであつてもそれが證明されないでは信ぜられない」（「ウオオルデン」、九頁）また曰く「老人が不可能だといふ事も試みればなし得られる。古い人には古い行動があり新しい人には新しい行動がある」（九頁）。當時アメリカのニユウ・イングランド地方は產業革命の影響を强く受けて機械文明がますます市民を不自然な、複雜な、虛飾が多くて中味の乏しい生活に追ひ込む傾向にあつた。生來野人的な要素

を多分に有つてゐた理想主義者ソオロウはかやうに沌濁した生活の中には窒息せざるを得ない。そこで宿望の單純生活を實驗すべく、コンコオドの村から數哩離れた森の中に小舍を自ら建て、日本流に云へば草の庵を結んで、極限にまで制約された生活資材に據つて、原始的に近い素朴な生活を營んだ。無論妻も子もない男やもめの暮しである。この生活樣式は、ただ生計費を稼ぐための心に添はぬ勞働を最小限度に喰止めさせるばかりでなく、貧そのものの精神的價値を體得せしめる、とソオロウは考へた。元來彼は文學史上稀に見るほどの自然愛好者であり、その正確緻密な知識は科學的博物學者のそれでないとしても、自然詩人的博物學者としては優に彼を英米文壇上の第一位に置かしめる底のものである。この自然愛とともに、彼は原住インヂャン民族に關する大きな興味と知識がある。且つまた彼はギリシヤ、ローマの古典、古いイギリス文學、印度支那の經典にも深い造詣があつた。自然と學問を通して人生の眞意義を闡明することが彼にとつては生存の第一義であつた。このためにこそ簡易生活の必要と利益があつた。

總ての人はそれぞれの天分に應じた人生の大事業を目指して進まねばならぬ、日常生活の煩瑣がその精進を妨げてはならぬ、とソオロウは考へる。そこで彼は簡易生活の福音を自分の體驗に據つて宣べようとした。それが「ウォオルデン」を書いた彼の動機である。

ソオロウが森の生活に入つたのは勿論風流や安逸を求めたためではない。彼は曰ふ「ただ人生の基本的事實にのみ直面し、人生が私に敎へる眞實を學び得るか否かを知り、また私が死に臨んだ際に、私の生存が虛空であつたと感じたくない」(六四頁)ため、つまり自己敎養のため、人生の道場として森の孤獨に入つた。

人生の道場で取組む相手は人生である。初めから人生を甘いもの、美しいものと假定することは出來ない。彼は曰ふ「強くスパルタ人の如く人生と取組んで、之を徹底的に究明し、人生が果して取るに足らぬ卑小なものか或は崇高なものかを知らねばならぬ。世人は概して人生が惡魔のものか神に屬するかについて確信を有たないで安易な結論を下して、神を讃へることを人生の主要目的だといふ」(六四頁)。彼にとつては卑賤と誤謬と邪惡に滿ちてゐる人生をただ苟めに肯定することはできない。

ソオロウは考へる——われわれの生活は凡百の些事のために吹つ飛んでしまう。この文明化した人生の波騷ぐ海を航して首尾よく目指す港に辿り着くことは難事であ

る。商工業が榮え機械力がのさばる文明生◇には人間精神の向上は望めない。自己の修養を忘れて物質的便益のみを顧慮する現代人の生活は複雜であり、空虛である。現代人の生活は慌だしくて浪費が多いと。ソオロウは諧謔的に曰ふ「彼等は空腹を感じないうちから餓死の仕度に餘念がない。『今日の一針、明日の九針』といふ格言があるが、現代人は明日の九針を惜んで今日千針の勞を厭はない」(六六頁)。これは將來の生活を安定させるために營々として心神を勞し、現在の時が齎らす幸福を享けない人々に對する諷刺である。現在を享樂することとそソオロウの生活哲學の要諦である。

人は眞實に眼を閉ざし皮相外觀に誤られて、因習に墮したみぢめな日常生活を續ける。須らく迷妄から醒めて現實を見なければならぬ。眞理は遠くにはない。現在の瞬間が最も神聖である。彼は曰ふ「苟くも我々が崇高なるもの高貴なるものを把握し得るには、我々を圍繞する實在を常住不斷心に注入し、以て心を浸し濡らさねばならぬ」(六八頁)と。

總ての煩瑣を免れ靜觀な生活に入つて、「大自然の如く悠々と一日を暮す」ためには、我々の生活を整理し簡素化し、「嚴しい節約」を行ひ、「スパルタ人にも優る單純生活と志欲の向上」を實現しなければならぬとソオロウは說く。彼は人生を强く肯定する。そして肯定した人生を最大限度に享樂するために、生活上の煩はしさを最小限度に喰止めねばならぬと考へた彼が決して世の常の隱棲遁世を說いたのでないことは明かである。良い享樂主義者は良い禁慾主義者でなければならぬといふ逆說は眞である。彼が茶を喫せず酒を口にしなかつたのは、茶よりも淸水の醍醐味を樂しみ、酒に醉ふより淸澄な大氣の陶醉をを喜んだためである。

四

野蠻人、貧民、求道者たちが如何に惠まれない環境にあつても、之を缺いでは生存し得ないものは食料である。ソオロウに據れば、人體は一のストオヴであり、食料はこれを熱する主要燃料である。この內部燃燒によつて得る生命の熱を保持するために、住居衣料燃料が外部から補助的に用ひられる。この四つはいかな簡易生活にも要求される。これら必需物資を獲得するためには我々は代價を拂はねばならぬ。抑々物の代價とは何かといふに、ソオロウに從へば、それは交換される物に對して卽時に或は永きに亘つてなしくずしに要求される自分の人

生の量である。例へば或る物を得るために自分の一日の勞働を必要とするならば、自分は自分の人生の中から一日をそのために犧牲にしなければならぬ。その一日が物の代價となる。從つて多くの代價を拂ふことは自分の生を多く削り去ることになる。生活が奢つて複雜になればなるほど削り取られる生の量が多くなる。單純生活の必要な所以は茲にある。

またソオロウによれば、人生は一所不住の旅である。人は乏しきに耐へて、天地の間に假寓する旅人の心を心として生きるべきである。生活に要する物は畢境方便であり、道具である、重要たるは人生そのものである。しかるに人は道具の道具となり果ててゐる。餓えれば卽ち木の實を取つて喰つた人は、農を業とするために己の田畑に拘束され、雨降れば卽ち木蔭に宿を求めた人は家持ちとなつて家に縛ばられる。定住安居を得た如く見えて實は心が物のために役せられるのである。物への隷屬から心を解放する道は生活の簡易化の外にはないとソオロウは考へる。

從つて衣食住の最低必要限度を檢討して、最も合理的な生活經濟學を實踐するために頭を働かせなければならぬことになる。

五

ソオロウは曰ふ——空に輝く天體と吾人との間を遮ぎるもののない野外の生活が最も望ましいが、現代人はかうした生活の味を知らない。現代人の生活は餘りにも家庭的に墮し、爐邊と野原との距離が遠くなつてゐる。住居を設計にあたつても、Yankee shrewdness（ヤンキー的な利口さ）を活かして、まともな住居を考察せねばならぬ。まづ絶體に必要な住居は極めて小規模のもので足りることを考へねばならぬ。鐵道工夫がその道具を納めて置く幅三尺長さ六尺の大箱一個は僅かに一弗位で購ひ得るが、これに通風のため穴を穿てば雨霙を凌ぐに足りるとソオロウは考へたことがあつた。（一三頁）

彼はまた曰う——空の鳥は巣を有ち、狐には穴があり インヂャンは天幕式のウィグワムを持つてゐるが、現代の大都市に住む人達の過半數は自分の住家を持たないでこれを賃借してゐる。そのために生計費は嵩む。またソオロウの附近に見られる普通の家屋一軒を建てるのに要する費用八百弗を稼ぐためには勞働者の生涯の十年ないし十五年を要する。（恐らくウィグワムに住む蠻人と雖も豪華な邸宅のためにこれ程の犧牲は拂はないであらう

と。）

ソオロウに從へば、近代文明は住宅を改善した程度に人間を向上せしめない。豪壯な邸宅は建築し易く、その中に住む高雅な人間を創造することは難しい（二六頁）

多くの人は住居の問題を眞摯に考へてゐない、とソオロウは云ふ。裁縫師が裁斷してくれる型の衣服を着なければならぬと想つてゐるやうに、住居に關する考へ方も因習的に墮してゐる。例へば多くの人は「空虛な來客のための空虛な客間」を設けるために多くの空間を浪費してゐる。

わが家を自分で設計し自分の手で建てることは一の愉悅である、とソオロウは說く。此の愉悅を永久に大工に委ねなければならぬ理由はない。鳥は己が巢を造り雛を養ふとき嬉々として囀る。人間もわが住居を自分で造りながら樂しく歌ふやうな氣分になつたら、その詩的才能も發達するだらう。

總じて職業的建築家は裝飾に凝る。しかし人間が家屋の建築樣式に思ひ煩ふこの愚さは、龜が己の甲の樣式を氣に病むのと同樣である（例のソオロウの諧謔）。アメリカ建築の中で最も趣の深いのは丸太小屋や、貧しい人の田舍家である。これに反して美飾を凝らした邸宅でもその中に住む人の精神が活きてゐなければ、それは棺桶に過ぎない。そうした建築師は棺桶屋の又の名に過ぎない。（ソオロウは時に辛辣な皮肉を言ふ）。

住居についてかうした理念を有つてゐた「實踐の哲人」ソオロウはいよいよ自分の家を己が手で造る計畫をたて、コンコオドの里から遠く離れたウォオルデン池畔の森の中にその場所を定め、村人から買ひ受けた古板や森から伐つた樅を材料に用ひた。木を伐るにしても斧一挺持つてゐないソオロウは隣人の斧を借りねばならなかつた。（使ひ了つて持主に返したとき、此斧の刃は借りた時よりも鋭利だつたとソオロウは如何にも彼らしく言つてゐる）。此の斧一挺で樅木材も床材も伐つた。樵人と大工を兼ねた仕事をソオロウは樂しみながら續けた。辨當のパンを伐り倒したばかりの松の上で食べると、パンに松脂の香りが移るのも嬉しい。工事を始めたのは三月であつたが、四月になると森の中には鶉が鳴き初める。五月の初めには友人も手傳ひに來てくれて棟上げをする。床板を張り、屋根を葺き終つて、いよいよ住むやうになつたのが七月四日獨立記念日の佳節であつた。炊事と煖房のための爐に土台だけ造つたが、煙突工事は秋まで持越した。そのため炊事は家の外の地面でした。パ

ンの燒けないうちに嵐でも來ると、火の上部に板を二三枚立て掛けて雨を防ぎ、ソオロウはその板の下からパンのできるのを眺めながら幾時間かを樂しく過すこともあつた。やがて煙突も出來て、池畔の家は完成した。幅十呎長さ十五呎（約五坪にあたる）の小舍である。ただ一つの部屋が台所寢室客間居間を兼ねて、住宅の魅力がその一室に集中してゐるとソオロウ自ら云つてゐる。

家具も極めて少い。椅子は三脚だけ。「孤居のときは一脚、友人を迎へるときは二脚、社交用には三脚。一時に來訪客が多くて座れないときは立つてゐて貰ふ。時に二十人三十人もの大勢をこの小舍に迎へ入れても鼻を突き合はさるほどの狹さを感じないのは不思議である」とソオロウは述懷してゐる。（九三頁）

またソオロウは曰ふ「窓掛けに金をかける必要がない。と云ふのは太陽と月の外にはわが家の窓から覗き込む者がないし、この二人には家の中を覗かれても異存はない、陽がさして家具に狂ひが來たり、敷物の色がさめる心配もない」（四九頁）

あるとき玄關の靴拭き用のマットをソオロウに贈らうといふ親切な婦人があつたけれど、彼はこれを辭退した。靴を拭くには戸口の芝土で事足りる。「禍の始りを避けるのが賢明だと彼は云ふ。必要のない物を持つことは彼にとつては正に禍であつた。彼に從へば、必要以上の家具を持つほど人は貧しい。過剩な什器は人の活動の自由を拘束する。それは輕快な蝶が蜘蛛の巣にかかつたやうであると（四九頁）。

ソオロウが此の小舍の建築に要した費用は、板材煉瓦釘など一切を合せて僅に二十八弗十二仙であり、（彼は事務家らしくその内譯を明細に書き誌してゐる。）一ケ年支拂ふ家賃だけの入費で彼の森の小舍は建てられた（三五頁）

六

ソオロウの食生活を覗いてみると、ここにも極めて簡素を尙ぶ彼の態度が見られる。彼は菜食主義者であり、稀に魚肉や獸肉を食することもあるが、大部分は野菜や果實である。ある八ケ月間彼が消費した食料は自作の豆とグリーン・ピースの外

米、糖蜜、裸麥の粗粉、碾割玉蜀黍、豕肉、小麥粉、砂糖、ラアド、林檎、乾林檎、西瓜、南瓜、鹽

であり、これに要した費用は八ケ月を通じて八弗七十四仙であるから、その食費は一ケ月一弗餘、一週僅に二十

七仙に過ぎない（四三頁）。彼は時には池で釣つた魚を食膳に上せたり、豆畑を荒すやまねずみを退治してその肉を試食したりした。彼は米を比較的多く食つた、そして「印度哲學を愛好する私が米を主な食料とするのは妥當だ」（四四頁）と洒落を云つてゐる。彼はパンを自分で造つたが、酵母は必ずしも必要でないのを知つてからは之を使はないでパンを燒いた。酵母の入らぬパンは營養價値が乏しいといふ俗說を排して彼は炊事の簡易化をはかつた。鹽がなければ海岸へ行つて海水を汲んで用ひるか、さもなければ飲む水の量を減ずる（四七頁）。すべりひゆ（馬齒莧）といふ雜草を茄でて鹽をかけ一回の夕食にしたこともある。結局二年間の體驗から「必要な食料を得るには、信じ難いほど僅少の勞を以て足りる」ことを彼は發見した。他の動物と同じやうな粗食を續けても人間は健康と活力を維持することができる。人間は必要な食料を欠ぐためでなく、美食のできないために饑餓に陷るといふ愚を敢て演じてゐる、とソオロウは因習的な食生活を嗤ふ。

七

衣服に關してもソオロウは極めて嚴しい單純さを實踐した。彼によると、衣料は體溫保持の目的と現代では裸身を蔽ふといふ社會的意義を有つ。しかしつぎの當つてゐる衣服を着ることはその人の價値に何等影響しない。美服を着ることに焦慮するよりは良心の瑕がないように意を用ひる方がよい。新しい仕事を始めるに新調の衣服は必要でない。靴がなければ裸足でことたりる。平常のチャケツとズボンと帽子と靴とが、以て神を拜するに足りればそれで十分である。（十九、二十一頁）

彼は又曰ふ「衣服の新調を要するやうな事業は總て戒心せねばならぬ……人間の換羽期は鳥の場合のやうに生活上の一危機である」（二十頁）また敵兵が己が住んでゐた時を攻略したとき、手に一物をも携へずに悠々とそこから去つて行つた往古の哲人のやうな衣生活の簡素を彼は推賞してゐる。（同）

八

ソオロウは學問知識よりも實踐を重んずる。彼は曰ふ――あらゆる分野の學問技術は教授されてゐるが、生活の技術は疎んぜられてゐる。事物を望遠鏡や顯微鏡を通じて觀ることは教へられても、肉眼で眼前の事象を觀察することは教へられてゐない。化學は研究されても己

の食するパンの造り方には無知である。海王星の新陪星の發見は重大視されても己の眼の中の塵を拂ふことに氣づかない（三九頁）と。

二人の少年をソオロウは假想する――一人は自分で鑛石を堀り出し、之を精煉して一挺のヂャツク・ナイフを造らうとして參考書をあれこれと讀むとする。他の少年は大學で冶金學の講義を聽き、ロッヂャ製のペン・ナイフを父親から買つて貰つたとする。一ケ月の間にこの二少年の何れが大きな進歩をするであらうか（三七頁）。と彼は問ふ。――大學でアダム・スミスやリカアドウを研究してゐる學生の父親がその息子の在學中に負債のために倒産するすることもあり得よう。生活の經濟學こそは哲學と同義である（三七頁）と彼は云ふ。

九

現代文明の齎らした幾多の進歩改善と稱せられるもの――例へば旅行のための鐵道、通信のための電信、その他凡百の所謂文明の利器も、ソオロウをして言はしめれば、必ずしも人生にとつて絶對的の恩惠ではない。人々はこの点に於て錯覺に陷つてゐる。彼は曰ふ「吾々の發明品器械は玩具であり、人生の重大事に對する吾々の注意を散漫にする。かうした物は、ただ方便のみの改善に過ぎず、目的は改善されてゐない」（三七）頁と。例へば一分間に一哩を疾驅する馬（ソオロウの時代には郵便自動車は未だ無い。）でも最も重要な消息を傳へるとは限らない。アメリカとヨオロッパとの間の電信でも、某國の姫君が百日咳に罹らせ給ふなどといふゴシップを傳へるのでは無意義であると。

ソオロウによれば徒歩が旅行の最も速い方法である。例へば三十哩を距つた場所へ見學旅行にゆくと假定する。ある一人は汽車でゆくとすれば、これに要する汽車賃九十仙は勞働者一日の所得を上廻る勘定になるから、これを稼いでから旅に出るとなれば、前の日既に徒歩で出發した他の一人の旅行者よりも目的地へ着くのが遲れる。遲速の問題を別としても、見聞を廣める点に於て徒歩が遙かに勝つてゐるのである。

一〇

いかなる形の拘束をも厭ふたソオロウは、一定の職に就かなかつた。職業は人の自由を拘束するからである。しかし生活のためには自分の時間を割いて仕事をせねばならなかつた。時には父の家業の鉛筆製造を手傳つたり

學校教師を勤めたり、その他土地の測量、大工、村での日傭稼ぎなど雜多の仕事をした。「私は十本の指ほどの職を有つてゐる」（四十二頁）と自ら云ふ。そしてその職の中でも、測量は殊に得意であり、また彼の製作する鉛筆も上質のものであつた。しかし彼は何れの職も之を定業としないで、隨時自分の要を滿たすために、最も拘束を受けない仕事をした。彼は五年間の經驗から、一ケ年に六週間働けば米鹽の資が得られることを知つた。

コンコオドの林野を逍遙することをこよ無く好んだソオロウはそこに自生するこけももの實（huckleberry）を摘んでこれを賣つて生計費を得ようとさへ考へた。然し「商賣はその扱ふ品に禍をもたらす」（五十一頁）ことを悟つて之を思ひ止まつた。彼は曰ふ「神の福音を傳へる商賣にしても、商賣の禍が之につきまとう」（同）と。

勞働のために勞働を愛する人や、閑居して不善をなす徒はよろしく勞働すべしとソオロウは云ふ。彼自身は最も拘束を受けない日傭仕事に年間僅に三四十日を費すだけで生活し得た。「素朴にして賢明な生活を志すならば此の地上の生活は苦しみでなくして娯樂である」（五十二頁）といふ確信に達したのである。

一一

しかしソオロウは簡易生活の悅樂を謳ひ、之を唱道してはゐるが、他人が必ずしも彼自身の生活方法に倣ふことを喜ばない。人それぞれに歩む道は異なつてゐる筈である。人はその父祖の跡を追ふ必要はなく、友人の思想や行動を模倣すべきではない。不羈獨立の精神こそソオロウにとつて最も尊いものである。當時コンコオド附近にはフリエ主義による集團社會生活の實驗が超越派哲人達などによつて試みられた。所謂「新しい村」はソオロウ時代の知識人の關心を集めた。しかしソオロウが之に參加しなかつたのは彼としては當然であつた。「不羈獨立の使徒」とも謂ふべきソオロウは社會への奉仕よりも個人の完成を重要視した。

徹底的な個人主義者ソオロウは獨居を好み、同じ屋根の下に他人と共に住み、同じ事業を他人と共に營むことを厭ふた。そして他人から恩惠を受けることを潔しとしなかつたと同時に、他人に恩惠を施すことに深い意義を認めなかつた。彼は云ふ——今日博愛家は街に溢れてゐる。自分も相當にさうした事は試みてはみたが、どうも性に合はぬ。良いことを爲すよりも、まづ良い人に成る

ことが緊要である。餘つた慈善ほど惡臭を發するものはない。「若し今ここに人あつて、私に恩惠を施さうとする意圖を以て來訪しようとしてゐるのを私が感づいたなら、私は人を窒息させるといふあのアフリカ砂漠の熱風の難を避けるやうに、命の限り逃げ出すつもりだ」（五四頁）

所謂宋襄の仁ほど無意義のものはない。眞の恩惠は精神的なものでなければならぬ。彼は曰ふ「わが交る人からその人物の花と實とを得たい。一種の香氣がその人から發し漂ひ、一種の熟した風味を交遊に加へるやうでありたい。一部分的な一時的な施し物でなく、永く無意識のうちに與へられる人間的の感化こそ最も貴い恩惠である」（五十六頁）と。

一二

ソオロウは森の家に住んで、讀書に耽けつたり、畑に豆を植えることもある。しかし現在に生き今の瞬間を享樂しようとするソオロウは、さうした心身の仕事のために彼の生を犧牲にすることを喜ばない。夏の朝などには彼は池水に沐した後、日の出から正午まで陽光を浴び、松や黃櫨の間の孤獨靜寂裡に小鳥の音を聞きながら、恍惚として夢想の世界に遊ぶ。太陽が森の家の西窓に差し込むのを見、遠くに旅人の車の音を聞いて漸く時の經過に氣附くこともあつた。

かうした白晝夢の中に過ごす時間は生の浪費ではなく寧ろ豐かにされ特に加へられた時である。ソオロウは東洋人の冥想と閑居の眞意義を悟る。さき程までは朝だつたのに、今ははや夕べとなつたが、その間に何等云ふに足る仕事をしなかつた。「雀がわが家の前の樹上で囀つてゐるやうに、わが心も和らいで鳴く音を立てるほどである」（七十七頁）

また「私の生活には普通の社會の暦日がない。小刻みに刻んだ時間がない。村人の眼から觀れば私の生活は全くの怠惰とも見えようが、鳥や花が彼等の標準で私をテストしてくれるなら、私は落第はしない筈だ」（同）と彼は云ふ。自然と調和合一の生活に最大の喜びを感じたのである。

ソオロウの生活はそれ自体がいつも物珍らしい娯樂であるから社交とか觀劇とかに樂みを求める必要がない。生活そのものが劇的場面の連續である。ソオロウは云ふ、倦怠を感ずる生活はその樣式が誤つてゐる。人がその天性に從つて生きてゆけば、年時鮮しい前景が展開さ

れる（七十七頁）と。

大自然と合一した生活を營む者に對しては、太陽、風雨、夏冬など自然は洪大な慈悲を惜しみなく與へる。それのみか自然は彼に深い同感を有つ。彼の悲むとき陽日はために曇り、風は嘆き、雲は涙する。大地と彼との間には心意の相通ずるものがあり、彼は草木の一部分となる。永遠に若い母なる自然は、彼に健康と靜寂と滿足を齎らす神藥を授ける。汚れない朝の空氣の一服こそは彼女の與へる萬能藥である。（九十二頁）

彼は曰ふ、自然のただ中に住むものには、心を曇らす憂愁はあり得ない。嵐の音はイイオラス神の奏でる琴の調べと聞える。降る雨は畑の豆を育ててくれる。松も私に同感してその細い葉を擴げて私の友となる。特に樂しいのは、春秋の長雨の時であり、終日家に籠つて雨の音は心を慰める（八十七頁）と。かやうに自然に陶醉しながらも彼は緻密な自然觀察を怠らなかつた。四季の移り變りに應じてコンコオドの野にさまざまな花が開く。その開花季を一日と違へずソオロウは知つてゐた。自然科學者ではなく自然詩人であつた彼は冷靜な理知の眼で自然を觀たのではなく、ほてるやうな溫い情緒で之に接したのであるが、その中にも自ら系統があり正確さがある点に於て、單なる風流人と趣に異にしてゐた。

ソオロウが實踐した農耕もかなり自然に即してゐる。豆畑の除草にさへ彼は疑念を有つた。「何の權利があつて私は弟切草など雜草を驅逐してその年古い草園を荒らすことができるか」（一〇一頁）と彼は云ふ。彼の農耕法は殆ど原始的で機具を餘り用ひない。露の降りた朝には裸足で畑仕事をする。午前中に百姓仕事が終ると、池に飛込んで丘の蔭へ泳いで行つて、そこで勞働の垢を洗ひ去つて休息をし、午後は全く自由な時間を樂しむ。

彼が除草してゐると、鍬先が石にあたる事がある。此地方の先住民族インヂャン族の石器である。ソオロウはかねてから此民族の原始生活に深い關心を有つて之を研究してゐたので、圖らずも畑から發掘される彼等の石器は測り難い大收獲であり、彼は豆畑を忘れ我を忘れてこれに見入るのである。青空の下で、自然から授けられた研究資料で好きな學問の醍醐味に浸る彼は、その日わざわざ町の講演會へ出かけて行つた知人達を憶ひ出して、彼等を氣の毒に思ふ（一〇三頁）。ソオロウにとつては農耕のわざも畢竟一の享樂である。收穫の一粒でさへ多からんため營々として汗して勞苦する農夫は既にその職業のために己の自由を犧牲にしてゐる。況んや營利のた

めの農業は物慾によつてその神聖が瀆される。彼は曰ふ「古代の詩歌や神話で神聖な技術とされてゐた農耕は、今日では土地を財産と考へる自己心のために墮落して、ただ利益追求の手段となつてゐる」（一〇八頁）と。

むすび

以上私はソオロウの生活とその生活觀を、なるべく彼自身の言葉を用ひて概觀した。彼が唱へ彼が實踐した生活方式が、我々二十世紀中葉の日本人にとつて、果してどれほどの被實踐性があるか、は讀者の判斷に任せよう。なるほど文明は我々の生活を複雜煩瑣にした。しかし他方文明はまた我々の生活を簡易化する機能をも有つてゐる。そして文明が決して我々の生活から詩を奪ひ去るものでないことも、我々は知つてゐる。ただ文明の名に於て我々の生活を毒し、之を醜惡化するものにこそ呪あれ！淸い簡素の生活と近代文明とは、必ずしも科學と魔術のやうに、調和し得ないことはなかろうと思はれるのである。

またソオロウが或る意味で美の探求者であつたことは認めねばならぬが、彼は藝術美に對しては深い關心を示してゐない。自然美には常に陶醉してゐたが、藝術作品の鑑賞には鈍感であつたらしい。此の点でもソオロウは批判されねばなるまい。

因みに本文に引用した「ウォオルデンの頁數は次の版に據る

"Walden: My Life in the Woods," London, 1904.